

賀堂流総本部の報告

3月20日(祝)に護国神社での吟道賀堂流第61回流碑祭の後、総会が開かれました。総会で検討され決まった事項、報告事項は下記のとおりです。

- 1 令和5年の総本部事業経過報告、総本部収支決算報告
- 2 令和6年度の総本部事業計画案、総本部収支予算案の検討
- 3 令和6年度登録会員数

	近畿本部	中国本部	京都本部	広島友の会	合計
男子	188	36	41	4	269
女子	320	43	66	2	431
少年	26	0	4	0	30
合計	534	79	111	6	730

- 4 創流90周年記念大会計画案報告
- 5 譜節関係の見直しについての報告と確認

①賀堂流内規第7条の見直し

「宗家の承認しない詩歌譜節を各本部主催(または総本部主催)の競吟大会で吟詠発表してはならない。ただし緊急の場合はその限りではない。」

*「競吟大会のみ」に変更する。

②半のべ入れ付きの引き下げ

(吟詠の栞 漢詩編 17頁⑳について)

2回程度ラ音を響かせて、シ音を強調する。

シ音を強調後にラ音で間をとる必要はない。

(=切らない)

*すぐに変更は難しいので2~3年の猶予期間を設ける。

③漢詩の譜節…旧漢字でなくて良い。

*NHKの「漢字講座」でも使っていない。



昇格おめでとございます！！

この度2月1日付で、次のお二人が初級に昇級されました。

さらに上を目指して、楽しく稽古に励んでください。

初級 松本佳祐さん(長天詩吟クラブ)

一級 太田昌子さん(秀邦詩吟クラブ)

第14回愛連フェスティバルの報告

令和6年3月3日「あましんアルカイックホール」で第14回愛連フェスティバルが開催されました。

第一部は吟士権者上位入賞者、第二部は各府県選抜者の吟詠、構成番組日本漢詩 二大詩人、菅原道真と頼山陽の漢詩・和歌の吟詠です。

十一歳の時に作詩したと言われる「月夜梅花を見る」から右大臣に登り詰め、太宰府に左遷されて病没するまでの和歌、漢詩をまとめたもので、頼山陽が道真を詠った漢詩を賀堂流の平山賀宝弓が阿部雪城と連吟されました。

山陽の漢詩が多く詠われていますが、山陽の母作詩の和歌も吟詠されました。

構成番組のナレーションでは、頼山陽・菅原道真の人生について詳しく語られ、これまでに知らなかった姿を知ることができました。菅原道真は、地元長岡京市の長岡京天満宮に祀られている学問の神様なので身近に感じました。吟詠だけでなく、漢詩の背景を知り学ぶ、良い機会になりました。(広報部)



ほっと一息、休憩タイム

春の言葉です。ご存じですか？

「春うらら」

冬から春への移り変わりの時期のこと。

冬の張りつめた空気が少しずつ暖かくなり、桜が少しずつ咲き始める季節の挨拶です。

春ののどかな雰囲気や穏やかな日の光をこう表現します。

「春爛漫」

春の花が咲き、光に満ち

満ちた様子をあらわす

表現。

浮き立つ春の言葉です。



R6/4・5月の予定

- 4/7(日) 定期発表会(1) 長岡京こらさ 13:00~
- 4/14(日) 全国吟詠コンクール京都大会 ラポール京都
- 4/18(木) 全国吟詠コンクール京都大会 ラポール京都
- 5/19(日) 京都府総連剣詩舞コンクール 京都教育文化センター
- 5/26(日) 一般研修会(和歌・俳句) 長岡京こらさ 13:00~
(講師:賀堂流総本部普及部長 小川 賀淳豊先生)
(事務局)

私と詩吟の出会い

小林賀秀亨

私が詩吟をはじめたのは、昭和49年ですから詩吟をつづけてもう50年になります。はじめのきっかけとなったのは、主人(小林賀清風)が千阪賀秀先生のところで漢詩と詩吟の勉強をはじめ、私にも声がかかったことです。

はじめは、千阪先生に「声が小さい!」とよく叱られました。声を大きくするのにとても苦勞したことを覚えています。

声を大きくするために、毎日、田んぼに行つて声出しの練習をしました。回数を数えるのに、マッチ棒を一回に一本ずつ手に取つて、たくさん貯めることで練習の励みとしたことが懐かしく思い出されます。

詩吟の魅力は、何といつても漢詩の意味です。詩文をよく理解し、その気持ちを詩吟に表わすことで、詠うことがとても楽しくなります。

私達がこれまで経験したことがなかった新型コロナ感染の時代を乗り越えて、ようやく大きな声を出して吟じることができるようになり、感謝しております。

齢を重ねるごとに何かと思うようにはなりません、これからも私のこの経験を教室のお弟子さんに伝えていきたいと思っています。

シリーズ その4
【城野静軒の世界】

奥 堂秀信

『舟中子規を聞く』の詩で、夜に八幡山崎を通過する船が、江戸末期にあったことに興味を持って調べてみました。京の伏見を賑やかに拓いたのは秀吉ですが、江戸時代の初期から明治の中頃まで、京都の伏見と大阪の4拠点(今の天満橋、淀屋橋、東堀江、道頓堀)の間、45Kmを結ぶ淀川水運を担った三十石船の定期船を開いたのは家康でした。

三十石船は、縦17メートル、幅2.5メートルの舟に船頭4人、乗客28~30人乗りが普通だったようです。

乗船料は、上り(大阪→伏見)が172文、下り(伏見→大阪)が72文で、運賃に差がついたのは、上りは曳船や竿、櫂などで船頭の負担が増えたからのようです。

運行は、上りは、朝に大阪を発ち、夕刻に伏見着。

下りは、夜に伏見を発ち、早朝に大阪着でした。

城野静軒のこの詩は、夜に伏見を発ち、1時間余り。

淀川を下る中、三川合流地点の手前あたりで、長岡京や山崎の桜の落花が浮かぶ中、船が静かに進んでいくと、どこかでホトギスが鳴いた様子を詠ったものでしょう。



伏見京橋の浜

会員投稿

桜の季節に想う

山田賀秀案

先年亡くなられた山本賀秀雲先生の書の作品に、「桜ほろ散る 院の庄」ではじまる岡山県民謡『忠義桜』があります。

この民謡には、2番と3番の間に詩吟が入ります。

また、この民謡のもととなったであろう漢詩を私たちは学んでいます。

てんこうせんきむなしゅうするなかれ

天莫空勾踐

ときにはんれい なきにも あらず

時非无范蠡



山本賀秀雲先生の書

斎藤監物作『題児島高德書桜樹の図』(律詩II 4頁)で広く吟じられています。山本先生もこの詩を愛吟されていたのでしょう。先生は水墨画にも秀でておられ、この作品には、桜の大樹が趣深く添えられています。

先生の穏やかな優しいまなざしが思い出されます。

シルバー川柳のご紹介(2)

前回いかがでしたか? 今回も楽しい川柳をお届けします。

- ・紙とペン 探している間に 句を忘れ
- ・初孫で 娘の家まで 定期券
- ・ひ孫・孫 名前混乱 全部言う
- ・誕生日 ローソク吹いて 立ちくらみ
- ・上向いて 歩こう今では 下見よう



『ぎんまい長岡京』 編集室
編集委員長 後藤賀秀香
編集委員 宮小路、櫻澤、本庄(庄)
※連絡・問合せ先 後藤賀秀香 Tel: 075-331-0241